

HISTORY OF MOBILE SUIT

ZION FEDERAL STATE

限定版



K.Olivera

BANDAI

HISTORY OF MOBILE SUIT

ジオン軍モビルスーツ 発達史

ジオン公国が今時大戦において、連邦軍に立ち並ぶ事の出来たのは、大戦初頭におけるモビルスーツ機動部隊の活躍による物である。モビルスーツは、ミノフスキーパーティー干涉下での有視界戦に焦点を絞った兵器であり、ジオン国防省の要請で数々の設計を繰り返した末の成果である。当初、軍の要求した内容を満たすためには、あらゆる戦略行動下にも適合し得る移動力、装甲、兵器搭載量を同時にかなえなければならなかつた。また侵攻作戦や作業性の問題から、構想確立後5年にモビルスーザンの基本となるMS-01である。国防部は新型兵器としてMSの型式番号を与えると同時に对外向には、作業用宇宙機として発表した。とりあえず基本形のみの状態から、ジ

オンは除々に兵器として性能を満たすべく改良研究を重ねていった。機動性向上と重装甲は機体とハイロットを保護する上で切実な問題だったわけである。実戦用モビルスーツと呼べる物はMS-04からであろう。期待を一身に背負つたMS-04はその後さらに無駄の排除を続け、全く人間型の外部デザインのMS-05(通称ザクモビルスーツ)で完成を見ること。

機動軍設立によつてMS-05は初期生産分二十七機によつて実戦部隊が設けられた。バイロットの養成と共に得たノウハウからMS-05は、さらに改良を続け、完全戦闘用モビルスーツMS-06ザクIIとして完成する。実際にMS-06は却下された。地上戦で重量配分と装甲の問題をいかんとも出来なくなる事を予測したジオン軍は、陸上戦用重モビルスーツMS-09ドムを開発する。熱核ジェットエンジンを装備したMS-09はホバリング走行によつて地上戦でのモビルスーツ移動力の問題を克服したと言える。

MS-06を伴なう駆逐艦隊の活躍は兵器史上、類を見ない物で、ジオン公国は宣戦布告から一週間の内に四つのサイドを殲滅、人類総人口の五十分の一を死に至らしめた。

その後南極条約等によつて事実上の膠着状態に陥つてからは、ジオンは地上部隊の増強のため陸上兵器としてのモビル

MS-06を基本上にそれ自体のバリエーションも様々な展開を見せるが、白兵戦での戦闘力をより強化したMS-07、MS-08を開発するに至る。どちらもMS-06をベースにした物であつたがコストとスペックの見合わないMS-08は却下された。地上戦で重量配分と装甲の問題をいかんとも出来なくなる事を予測したジオン軍は、陸上戦用重モビルスーツMS-09ドムを開発する。熱核ジェットエンジンを装備したMS-09はホバリング走行によつて地上戦でのモビルスーツ移動力の問題を克服したと言える。

基本設計で汎用性を求めたため、ジオングは局戦用にはザクと別設計のモビルスーザンを作らねばならぬ不運に会つた。各地での地上制圧のために不可欠となつた視界戦でのモビルスーツの効能に頼る必然性が無くなつたからであつた。しかしニュータイプとして覚醒した人間も少なかつたため、一部のニュータイプバイロットに合わせた物である。その意味で格闘戦を本意とするモビルスーツ型の究極としてMSN-02ジオング(MS-16)

MS-06ザクIIの バリエーション

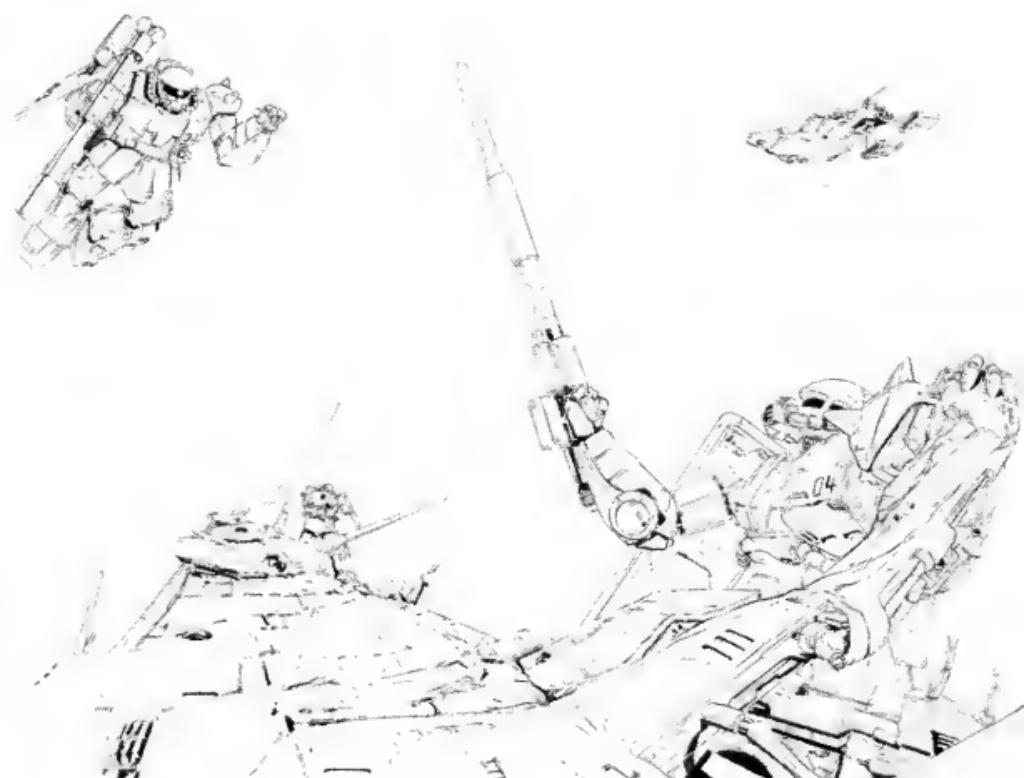
M S - 0 6 ザクIIは、全てのモビルスーツの基本であり、これをベースにあらゆるザクのバリエーションが生まれた。当初空間戦に使用されたザクには**A**、**C**、**T**タイプがあるが、**A**はほんの少数が生産されただけで、生産ラインは**C**タイプへと受け継がれた。外見上の差異はほとんど無いか、コクヒットの開閉システムが異なっていた。続く**F**タイプではハイロット側からの意見でコクヒットの改良とハイロットが一部変更となつた。

優れたハイロットを擁護するのはいつの世も同じだ。ザクでも一部の要請に応じて機動性の高いモードを生んだ推進エンジンの出力を3割アップした**S**タイプである。これは指揮官用として百機余り建造されたと言われている。さらにザク本体自身の性能向上を計るためにエンジンの推力を倍にアップし、増速用ブースターを設けた**R**タイプが作られた。この**R**タイプはコストの問題を大きくかえたため、ハイロットの練度の低下か

ら少数が生産され、一部の熟練ハイロットに使用されたにとどまつたが、燃料搭載量を増大化し**R**09タイプと機種選定で争った**R**2タイプもある。初期から中期にかけては強行偵察型として**E**タイプ（モノアイを大幅に改良、軽量化して探知システムを各部に設けた）か、トレーナーとして**T**タイプも少数ながら生産された。

地上戦では**F**タイプから不用なシステムを無くし軽量化を計った**J**タイプが主に活躍している。これを基にあらゆる研究試作機が誕生した。最も需要の高かつたアフリカ・アジア向けに熱帯戦用**D**タイプを提供、対空防衛と中距離支援のために**K**(J-12)タイプ、水流エンジン試験用**M**タイプ、移動性をアップした**G**タイプ等がつくられた。

ザクはあらゆる研究母体に使用されたが、異様を極めたのはサイコミュシステムを搭載した**Z**タイプであろう。**M S N** 02のテストベースに使用された物で、そのまま装着したため、腕だけが異常なオーバーサイズとなつていた。



HISTORY OF MOBILE SUIT

MS-05用280mmバズーカと
固定器

▼ MS-05A



▼ MS-06F
機雷散布ポッド付



◀ MS-06F
空間戦用



▼ MS-06J
湿地戦用



MS 06R サク

▼MS-06R-1A

三連星使用機



▼MS-06R-1



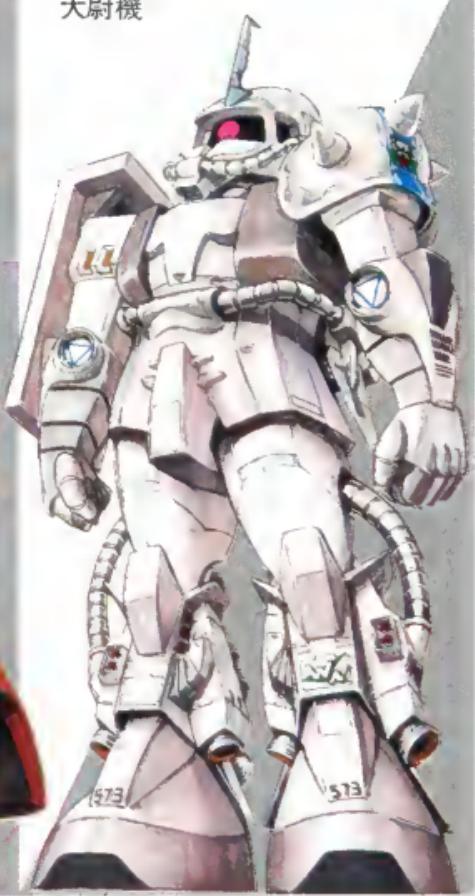
▼MS-06R-2 ジョニー ライデン

少佐機



▼MS-06R-1A シン マツナガ

大尉機



HISTORY OF MOBILE SUIT



MS-06R はそれまでの主力であった **F** タイプの性能向上を目的として計画されたタイプである。試作上の改修点は、背部、腰スカート、脚部で、ここを中心としたエンジンのハワーアップが計られた。殊にランドセルは通常タイプをはるかに上回る推力二一八トンの物を二機装備するという徹底ぶりである。テスト用の一・二号機は全体をオレンジイエローに塗装し、クラナタ基地で各種テストが行なわれた。このテストの際にはザク開発担当からのテストハイロットであるエリオット・レム少佐が招かれ、少佐自らが一号機を操縦して2週間に渡ってテストを繰り返した。性能は極めて良好で、即時量産化が決定、R タイプの形式名称を与えられ初回生産分として22機が発注された。

ロールアウトした機体は実戦テストを兼ねて各方面へまわされた。但し開戦当初の作戦で **MS-05** 部隊からい三連星はその最たるものであろう。彼らはチーム行動の優秀なハイロソトを多数失なった事は未だ大きな影響

を残しており、高機動型として開発された R タイプを操作しきれぬハイロットが続出したのである。これは F タイプにも言える事だが、機体内部にわずかしか搭載し得ないロケット燃料をすぐに使い果してしまい易い事が、ハイロットに恵まれなかつたザクの不運と言えよう。

MS-06R には大きく分けて 3 つのタイプがある。

元々燃料の補給は母艦であるムサイもしくは、バルキリー・タイプの空母で可能であったが、度重なる戦場からの報告に、背部及び脚部の燃料房が簡易カートリッジ化された。改修前の 22 機までを（内 10 機余りは後に同仕様に改修）**R-1**、その後のカートリッジ式の物を **R-1A** として区別する。

作戦を共にするムサイにも、この補給設備を設け R タイプを主とする、またはのみで構成する小隊単位に一機の割で補給用のザクが随伴した。

機体自体は熟練ハイロットによって高性能が見出され

たが、R タイプを実動させるために必要な条件が複雑化し、低価格、簡易性を欠くためその後の生産は中止された。とは言うもののエースハイロットからの評判は良く、生産ライン上の十数機に至るまで各方面より引き合いが入り、残数は注文調整の形で一機ずつが渡されたという事である。

R タイプの使用例は、各エースへまわされた事も手伝つて派手かつ有名な物が多い。中でもキシリア少将直属である **A** ガイア少尉（後に大尉で戦死）率いる「黒少佐」はその最たるものであろう。彼らはチーム行動

をとるようになってから、**MS-05B** **MS-06C**、R と乗り継いでおり、S タイプからは、ブラック、ハーブル、ミディアムシーグレーの 3 色を基調にしたチームカラーを用いたが、これは彼らが初の **MS-09** 小隊として地球に降りた時にも使用、後に **MS-09** の正式塗装にも採用されている。

R-1A を駆るエースの内、三連星に次いで有名なのは、ソロモン方面軍のシン・マツナガ大尉である 26 才という年令にして開戦より 5 隻のサラミスとマゼラン一隻を単独で撃沈せしめ、トズル中将戦場視察（実際は戦闘参加）の折に中将の護衛を務め上げた猛者である。彼は乗機をホワイトとグレーで塗装し、「白狼」として恐れられた。

MS-06R の 3 つめのタイプは、**MS-06** の後継機選定で **MS-R09** と争った **MS-06R-2** である。燃料搭載量を 18% アップし、脚部装甲を強化、コクヒットをダイレクト・インに変更など、各種改修を行ない 4 機がつくられたが、もはや一部性能で優れてはいる物の総合性能で **MS-R09** には今一步遅れをとつていた。この **R-2** タイプもしばらくしてエースへまわされたが活躍した例は、ジョニー・ライテン少佐の乗機が有名である。機体は真紅に塗装され、各所に黒を使った実に鮮やかな物であつた。戦後の写真集で「赤い彗星」の **R タイプ** として誤まつて紹介されているのは、このライデン少佐の乗機である。

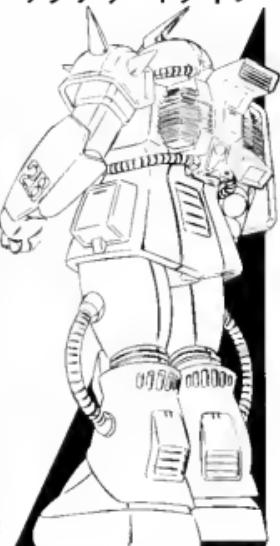
ジオンの地上部隊の侵攻で数々の改良がサクに施されたが、局戦用として最も要請の強かった物は、熱帯・砂漠戦用タイプであった。局戦用モビルスーツとしては、固定武装を強化したMS-07がすでに進行中であつたが地上戦用のMS-06Jの需要の最も高いアフリカ戦線向けとして、サクの改修フランはスタートしている。

軽量化と共に基本的な出力のアップから手はつけられた。またその分は実戦データから部分的に増加装甲がつけられ、特殊武装の開発にも焦点があつて、28機が作られた。

ジオンの地上部隊の侵攻で数々の改良がサクに施されたが、局戦用として最も要請の強かった物は、熱帯・砂漠戦用タイプであった。局戦用モビルスーツとしては、固定武装を強化したMS-07がすでに進行中であつたが地上戦用のMS-06Jの需要の最も高いアフリカ戦線向けとして、サクの改修フランはスタートしている。

軽量化と共に基本的な出力のアップから手はつけられた。またその分は実戦データから部分的に増加装甲がつけられ、特殊武装の開発にも焦点があつて、28機が作られた。

MS-06D ザクデザートタイプ



固定する事も出来た

MS-06Kは、ジオン軍地上部隊の作戦時に、より機動性の高い対空防御の手段として考案されたタイプである。マサーフランでは、単にMS-06Jに対空砲をオフショント装備するという物で、重量バランス等の問題を解決出来ぬまま進展を見なかつた。

その北米キャルフォルニアへ入電したRX-スースの情報によつて再度内容が検討された。試作上、対空防御を主意とせず、対MS戦における支援を目的としたのである。1号機はキャルフォルニアでロールアウトし、モニターアイを全周式に改め、右肩に一八〇ミリキャノン砲が一門セットされた。これは背部のランドセルに一体化しており、換装すれば基のJタイプ同様に扱う事が可能であった。脚部には07のノウハウを活かして補助推進機が装備され、機動力を補つている。

これは背部のランドセルに一体化しており、換装すれば基のJタイプ同様に扱う事が可能であった。脚部には07のノウハウを活かして補助推進機が装備され、機動力を補つている。

MS-06K ザクキャノン



あら

ジオンは地球侵攻作戦において、水中行動も可能なモビルスーツの開発の必然性を覚えた。当初のフランはMS-06の水中戦可能化であつたが、スペックは思う様に満たされずこのフランはサクを基本的に水流エンジンの実用試験と、水中戦用兵装のデータ収集という道で続行された。当然平行して新設計のモビルスーツ開発が進められたわけだが、こちらは形式名称をMS-06Mとして5機のフロトタイプに水流工場でロケットホットを2種、腰にはSA-7-2クラッカーホッド、マシンガンは多少の改修を施したもの。配備しきれなかつたドムの代役は充分果したと言え、初期は2種で43機ずつ、後期にはアンテナをシングルに統一して28機が作られた。

これは背部のランドセルに一体化しており、換装すれば基のJタイプ同様に扱う事が可能であった。脚部には07のノウハウを活かして補助推進機が装備され、機動力を補つている。

これは背部のランドセルに一体化しており、換装すれば基のJタイプ同様に扱う事が可能であった。脚部には07のノウハウを活かして補助推進機が装備され、機動力を補つている。

これは背部のランドセルに一体化しており、換装すれば基のJタイプ同様に扱う事が可能であった。脚部には07のノウハウを活かして補助推進機が装備され、機動力を補つている。

これは背部のランドセルに一体化しており、換装すれば基のJタイプ同様に扱う事が可能であった。脚部には07のノウハウを活かして補助推進機が装備され、機動力を補つている。

MS-06M 水中用ザク



HISTORY OF MOBILE SUIT

MS-06K サケ対空砲装備型 MS-06M サク水流エンジン試験機

▼ クレーテン中尉機



▼ MS-06K



▼ レッドドルフィン
所属機



▼ MS-06M



▼カラカル所属機



▼MS-06D

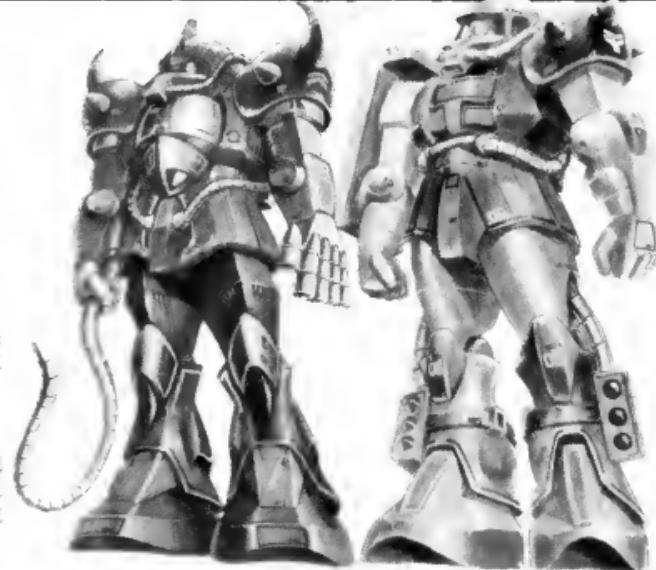


▼ピンクパンサー所属機

▼作業用ザクタンク



MS-06ザクIIからMS-07グフへ



ルスースの開発に着手する軍が発注したフランはYMS-07とYMS-08として平行して試作がすすめられた。07は地上戦にラジエーターのバーアップが計られ、格闘戦用に部分的に装甲を強化した。さらに移動力を補なうために脚部には補助推進システムを追加している。08タイプは主に接近戦、ゲリラ戦を念頭において07以上の軽量化が計られた。

兵装は共に固定武装の増強が見込まれた。07の1・2号機は、左腕に五連式75ミリマシンガンを仕込み、右腕にはヒートロッドと呼ばれる伸縮式の一種のムチが装備された。

08では研究中の推進エンジンを背中に装着、短距離のジャンプ飛行が可能な様に設計されたが、出力不足に悩まされ結局は07のフランへ統合という形で、5機が作られたにとどまっている。MS-07として正式承認を受けてからは、数々の改良が行なわれた様である。

MS-06Jに代わる地上戦兵器として、MS-06Jの限界を見出したジオン公国は、白兵戦用に機動性を向上させたモビ

MS-06Jの生産ラインは途中から07へと切り替わっている。MS-07は当初マシンガンとヒートロッドの生産よりも先行したため、固定武装を持たないタイプがある。このタイプはAタイプとして32機が生産された。同時にランバーラル大尉が、ガルマ・ザビ大佐の仇討ち部隊として降りた時に使用したのは厳密に言うと、量産先行型のYMS-07Bタイプである。これは標準装備型のMS-07Bと全く同じ物だが、チューニングは慎重に行なわれていたため、戦果ではかなりの好成績を納めている。

MS-07が成功をおさめたのは結果的な事だが、武装を固定化したため、かえって不便を訴えられたのも事実である。しかしながら予備装甲としてシールトを分離した点は評価されるべき物があると言えよう。基よりザク以上の装甲厚と機動力を持つためこの事は忘れられがちだが、装甲に頼る事が危険であると知つているハイロッドにとつては、ドム配備後も強い人気を誇っている事から頗推する事出来る。

6に対してもMS-07からは局戦用スリットとしての色がより一層濃くなつてゆく。MS-07のCタイプシリーズでは部分的なマイナーチェンジが次々と行なわれた。両腕をマシンガン付にしたC-1を始め、脚部の補助推進機を大幅に変更したC-4、特にMS-07シリーズ中でも異色の物は、一応C-5の名称で一機がつくられたにとどまっている物である。モニターライのシステムは十文字型となり、固定武装としてヒートサーベルが装備された。実の所、このタイプはジオン軍がYMS-09の開発に際してMS-07から近いデータを算出するために作ったものであった。

さらにMS-07の飛行可能フランとしてMS-07Hの名でつくられた物が存在した。これは07タイプの移動力をより高めるため、MS-07自身を飛ばしてしまったという物であつた。合計4機が製作されたにとどまつたが、実際短時間の飛行は可能として、種々の問題が存在した事は言ふまでもない。このフランはトダイYSとのコンビネーションで昇華された。

M S - 0 6 タ イ フ を 基 本 と し て 地 上 戰 用 に 多 く の 派 系 型 が 生 ま れ た か 、 殊 に M S - 0 6 J の 限 界 を 見 出 し た ジ オ ン 公 国 は 、 白 兵 戰 用 に 機 动 性 を 向 上 さ せ た モ ビ

ア ジ ア 方 面 に 主 に 配 備 さ れ 、 旧 態 か ら の 凡 用 兵 器 と し て 限 界 点 を 見 た M S - 0

MS-09ドム

モビルスーツによつて連邦に対し優位に立つたジオン公国ではあつたが、成功作MS-06に過大な多用性を見出そうとしたため、地上戦において設計を新たにしたモビルスーツの必要性は足早にやつてきた。

かねてよりMS-06に高性能を追求するためMS-07が誕生するまでになつたが、陸上での移動力に難点が集中し、飛行可能なMS-07や、ドライヤYS等の対策が成された事は有名である。ここにおいてジオン軍が検討したのが陸戦用に最も要求された機動性を満たすホバーフェット推進機能を持つモビルスイツであった。白兵戦用に軽量高機動のRX-78を参考にザクを改良したのがYMS-08Aであつたが、すでに却下となり欠番となつていたため、YMS-09の名称で試作が進行した。

開発は全て新設計による物で、開戦から6ヶ月以上を数えてロールアウトした武装は重火器の使用が可能となり、専用兵器として三六〇ミリロケット砲と、M-07C-5にも装備されたヒートサヘルが与えられている。試作はジオン本國で行なわれたが、実際に完成した一号機、2号機は、直ちに地球へ降ろされ、各種テストに使用された。最新鋭機として大きく期待された同機のテストには宣伝用フィルムのために数多くの将軍達が召喚されている。実用試験には1号機にフレデリック・クランベリー大佐が搭乗して花を添えている。確認される記録では、1・2号機共に部隊マーク風に描かれているのは、式典に際してザビ家の命令によつて施されたマーキングであつたと言われている。

続く量産型との差異はほとんどなく、外装上の整理が行なわれたにすぎない。記録によると、YMS-09は2機にとどまり、数週間後に正式にMS-09として生産がすすめられた。



地戦での使用に問題がなかつたというわけではなく、現地からは改善要求の提出が少なからざあつたと言わわれている。特に近距離用の通信アンテナと、頭部の放熱バиф、背部推進機の形式は差し戻してYMS-09方式が採用されたと。いうことになる。地球上でのドム自体の配備にも時間がかかつたため、この熱帯戦用タイプの改修は正式承認以前の物としてキャラル・フォルニアベースが工作を代

行しただけの物であつた。この仕様のオフションパーツは、一部へ向けて生産が行なわれたが、実際に使用した例は10機に満たなかつたと伝えられている。MS-09ドムは地上戦におけるモビルスイツの行動力を大きく変革した。局部戦用の要素が濃いにもかかわらず、地上の一般型モビルスイツとしてザクの存在を大きく退しきれた事は大きな事実であり、一応の頂点を見出したのである。

HISTORY OF MOBILE SUIT

YMS-09 MS-07C-5 YMS-08A YMS-07

▼YMS-08A



▼YMS-07



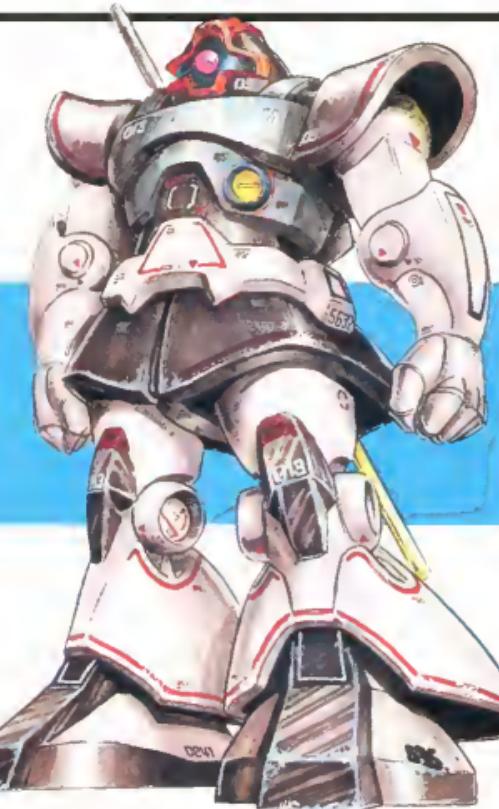
▼YMS-09



▼MS-07C-5



► MS-09 ドム



◀ トロピカル
テストタイプ



► マケベ大佐用
カスタムグフ

HISTORY OF MOBILE SUIT

ジオン重モビルスース 開発の流れ

ジオン軍のモビルスース開発は、「S・U・I・T」プロジェクトに着手してから五年目にして、初の実戦型であるMS-105Aザクが完成した。この間は機密と苦闘の時代といえるだろう。MS-105は、さらに改良が続けられ、完全戦闘型MS-106ザクIIが誕生した。その中の三番目のモデル、Fタイプでは、それまでのモビルスース開発の経験と技術の総決算だったといえる。

Fタイプの完成はジオン軍にとって、フロジェクト全体の開眼といえる。そして同タイプを原点として、次々とMS-106のバリエーションが誕生した。平時であるならば、ようり完成されたモデルへと開発が進むはずだが、戦局の悪化は開発の方向を変えてしまった。ジオン軍部は日々変化する戦局に対応するため、Fタイプを起点とするバリエーション開発に固執してしまい、真に必要なタイプのモビルスースの開発、実戦投入を遅らせてしまうという結果を招いた。

MS-06F ドズル・ザビ中将機



宇宙攻撃軍統司令ドズル・ザビ中将の乗機は、MS-106FザクIIをベースとしたカスタムタイプである。基本的にはFタイプと変わらないが、徹底的なチューニングとドズル中将の体格に合わせてコクピット容積の拡大、並びに両肩のアーマーを四本スピーカー付きアーマーに変更されている。同時に武装として、特製の大型ヒートホークも製作されている。一般にこのような高官の乗機は、ステータスシンボルとして存在するのだが、ドズル中将の場合はルウム戦役のとき自らこのモビルスースに乗り、戦場視察の名目で、個戦隊のモビルスースを引き連れ実戦参加している。

MS-06FS ガルマ・ザビ大佐機



Fタイプは、Fタイプに10ミリマシンガン1門を搭載したタイプで、Fタイプの生産ラインから一定の割合で生産されたといわれている。このタイプの機体はSタイプが登場するまでの間、部隊指揮官とか接近戦を主任務とする部隊に配備されたが、搭載されたマシンガンの効果のはどは期待されたほどではなく、あまり記録も残っていない。なお、高官の使用例としては、地球攻撃軍司令のガルマ・ザビ大佐が、チューンナップしたFSタイプを持っていた。だが、ガルマ大佐自身は、ガウ攻撃兵用やドッフ制空戦闘機を多用していたこともあり、個人専用モビルスースがあつたことはあまり知られていない。



Sタイプは、練度の高いハイロットの要哨によつて開発されたもので、Fタイプをベースにしたパワーアップモデルである。別名、指揮官用ザク」と呼ばれたのは、Sタイプが主に部隊指揮官に配備されたことからきている。Sタイプの特長は、Fタイプより30%も出力の高い、二二七クラスの推進エンジンを2基搭載していることだ。ハイロットによつては、Fタイプの3倍の機動力を記録した例もあつた。このSタイプを愛機としたエリスパイロットには、『赤い彗星』として知られるシャア・アズナブル少佐がいる。彼がマスクした戦果の大部分は、このSタイプを乗機とした時期に記録されている。

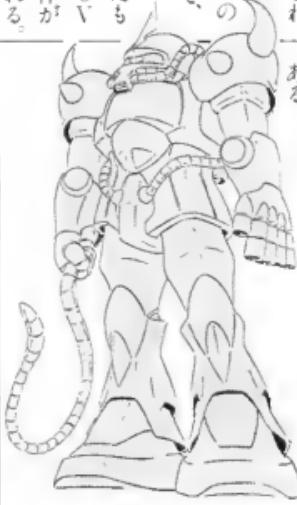
MS-06S シャア・アズナブル少佐機

MS-O6W 作業用ザク



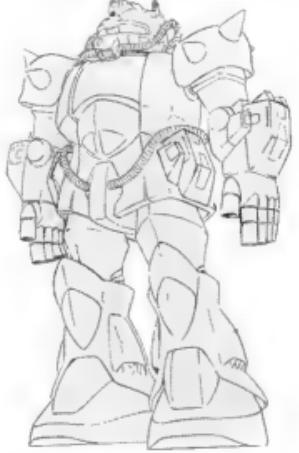
このタイプのザクは、ジオン軍利式番号記録に分類されていない型式である。とは言ふものの、前線特兵は、一般にWタイプと呼んでいた。戦後の記録から確認する限りでは、大戦中期にアジア西部付近でこの作業用ザクを見ることができる。特徴としては、背部ランダセルを削除し、段式荷物デッキが新設されている。また、胸部に大型スコッフやウインチも追加されていた。だが、全く同一の外形を持つ機体が発見されなかつたことで、おそらく地じでの運動性能が思わずくなつたと思われている。流れ的にはMS-I-06Vにつながるタイプであるが、かなりの機体が再武装され、戦闘に参加したものと思われる。

YMS-O7B ランバル大尉機



ジオン軍は地球進攻にしたがつて、MS-06より自兵戦性能を強化した新型モビルスイツ、MS-I-07ザクを完成させた。Aタイプは、機体の生産が先行したことから固定武装を持たないタイプとして生産されたが、このBタイプでは当初の計画通りに、左腕に五連装75ミリマシンガンと右腕にヒートロッドを装備した。生産はそれまでのMS-I-06Jの生産ラインを流用し、量産先行型のYMS-07Bをへて、完全量産型のBタイプが生産された。同機の使用例としては、量産先行型ではあるが、連邦軍新鋭艦ホワイトベースの追撃隊隊長のランバル上級大尉の機体がある。

MS-O7C-3 グフ重装型



地球進攻が進むにつれて、戦局は多様化し、それまでの主力モビルスイツMS-I-06Jでは、状況に対応しきれなくなつた。そこで登場したのが、グフのCタイプシリーズである。このタイプは部分的なマイナーチェンジが次々とおこなわれたことで、より、専用地戦用モビルスイツの色合いが濃くなつた。その中で、C-13タイプと呼ばれる機種は、重装甲武裝で知られている。特徴としては、右腕のヒートロッドが廃止され、両腕に5ミリ五連装マシンガンと頭部に30ミリマシンガン、両腕には予備マガジンがそれぞれ装備されてい

MS-O9 ドム 黒い三連星使用機



地上でのモビルスイツの移動力の低さを解決すべく開発されたMS-I-09は、熱核ジェットエンジンとロケットの複合推進機を装備している。また、それまでのモビルスイツ以上に重装甲と、新開発の360ミリジヤイアントバズとの組み合せて、重モビルスイツの名をほしいままにした。このタイプの量産機を初めて配備された部隊は、『黒い三連星』で知られる空襲機動軍第3師団の特務小隊であつた。彼らの得意戦法である、ジエットストリームアタックは、MS-I-09をして初めて地上でも可能なとなつた。後にオデッサ作戦で、彼らとRX-78の対決は広く知られている。

HISTORY OF MOBILE SUIT

MS-06Fカスタム、MS-06FS、MS-06W

■MS-06FS

カルマ=ザビ
大佐機



■MS-06F カスタム

トルスル=ザビ中将機



■MS-06W

作業号 サク



MS-06S、MS-07C-3、YMS-07B、MS-09



ジオン軍の特務用MS

ジオン公国のモビルスーツコンセプトは、基本的にモビルスーツ単体に対して多くの汎用性を求めたため、用途変えのタイプに関してはほぼ新型をおこさねばならない実情に絶えず追われていた。よって国力の貧弱なジオンの体制としては、限られた基本から出る事なく種々の状況に対処しなければならない運命を背負っていたのである。

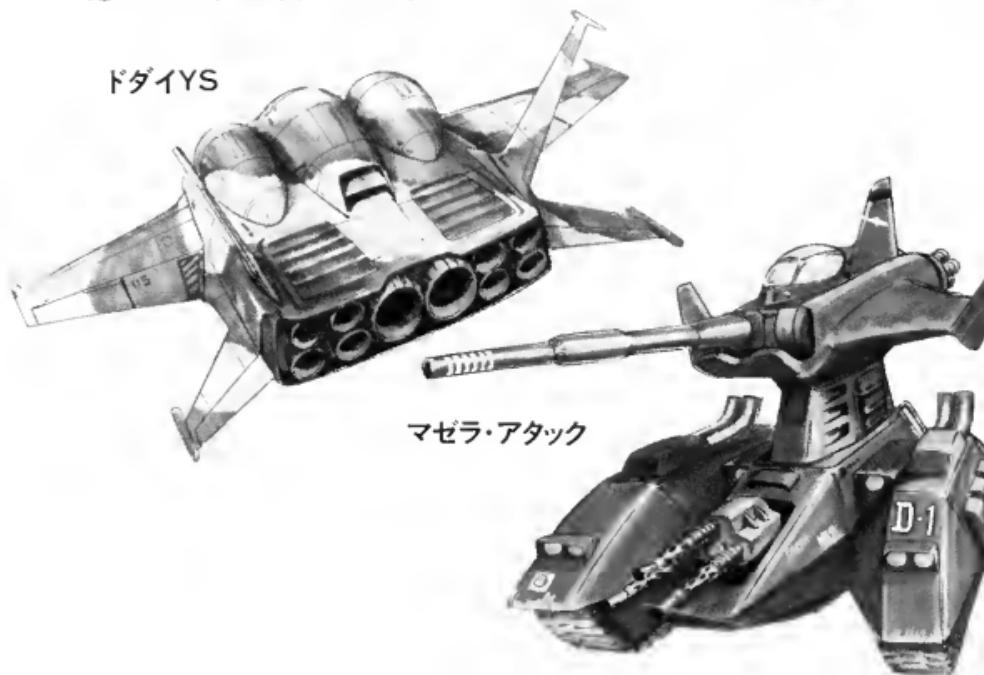
殊に連邦軍のコアプロックシステムの様なプランを当初考えられなかつた事は、戦線の拡大化と膠着化に大きな影を落としてゆく事となり、限定使用の目的に対しても、基本設計をあらためる必要性が生じていった。第一の問題はモビルスーツ機動部隊の移動力である。地上侵攻作戦において、ザクにある程度の見切りをつけたジオン軍部は陸上戦用にMS-107を開発し、各地への実戦配備がすすめられたが、この時点でも走行速度に制圧区域能域の拡大化が進めにくかつたのは事実である。ジオン兵器開発部で提案されたのは、モビルスーツ自体に飛行能力を持たせる物であつた。このフランには当然無理が生じたのは明らかであり、局地戦用に開発配備されていたドダイにモビルスーツ搭載性を持たせる事で除々に改善されていった。移動力の問題は憂慮された期間が比較的

長かつたが、MS-109タイプの開発によつてほぼ9割は実戦投入と同時に解決を見たと言える。

もう一方は量産ラインの生産性の問題がある。本来モビルスーツの効用は戦闘時ののみの物ではなく、作業性の面も比率としては大きい。ザクによるザクの運搬や整備は当然の事であり、人間型の拡大は伊達ではなく、ザクに搭乗しての一〇〇mmマシンガンの独自分解、整備、組み立てさえ可能であった。但し先述の様に生産率の低さから最前線へあまねく兵器が送り込まれるという事もなかつたわけである。そこで現地案の吸収によつてザクの上半身を利用してマゼラアタックと簡易に組み合わせた作業車輛が製作された。実戦時に使えない事もなかつたか、主に工作用、作業用車輛としての有効性を示した。ザクタンク自体も使用不能となつたモビルスーツの再利用だが、逆に回収車として大いに貢献した様である。

戦闘用特殊MSとしては、ジャブロー攻略のみを目的として製作されたアッガタ、イブと呼ばれる物がある。これは兵装と機能を分担し一用途のみのスーツ3種をチム化して使用する。先峰として堀削用が道を開き、重火器で強行、格闘戦用スーツが白兵戦にのぞむという極めて限定された用途による物であつた。アッガタイフはその極端な例だが、水中戦用、水陸両用、湿地帯用モビルスーツの後期の使用目的は、ほぼジャブロー攻略に基づく物であり、大戦末期における地上戦用スーツは、各地での使用に方向性を限定していたと言えよう。

ドダイYS



MS-106E ● 強行偵察型

初期からの宇宙空間戦には、MS-106タイプのみでの戦闘展開が進められた。ここでMS-106タイプの機動力を利いて、戦略偵察機への転用が考慮された。装甲性はほぼ同じであるため、実際に探知システムの交換性を高めて設計した場合には、偵察型の即時武装化も可能であったからである。MS-106Eとして承認されたタイプは、通常のCタイプやFタイプから兵装に必要な部分を極力削除し、燃料スペースを10%増加し、機体各部に探知システムを装着した物である。頭部モノアイは、接近戦用のカメラを大口径の高精度タイプに換装し、ガラスシールドの廃除とモノアイケージの縦ローラ化も可能としていた。新設置のカメラは、両肩に1基ずつさらに腰の関節ブロックを前方へ延長しカメラを収納していた。メインのロケットバーニアに加えて、機体左右胸部には緊急離脱用ロケットが装着されており、この部分が通常の06と異なる部分であった。さらに大戦中期には頭部カメラを3基にして、背部に折りたたみ式複合探知システムを装備した改良型MS-106E-Iも16機が作られている。形状から「フリッパー」の愛称で呼ばれた。



MS-107H ● 飛行試験型

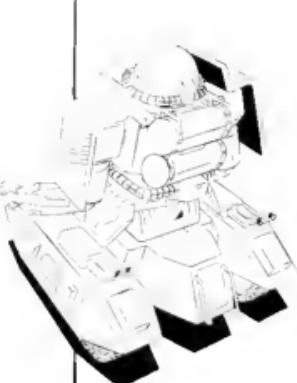
地上戦用モビルスーツMS-107は、MS-106Jに代わるべく生産と配備が行なわれたが、移動力を向上させるためモビルスーツに飛行能力を与えるフランが配備とほぼ同時に提案された。推進システムは脚部を中心に強化され、背部のロケットバーニアに加えて腰にも同様に2基の推進機が設けられた。量産先行型のYMS-107A 3機とB-1機は直ちに仕様を統一し、計4機はサイド3での改修工作を終えてアリソナのフラットネイル基地へ運ばれてテストを開始。航空機部門からビリー・ウォン・ダイク大尉をチーフとして6名のテストパイロットチームを編成して4週間の準備期間内に4機総計で38回のテスト飛行が行なわれたと記録されている。



MS-106V ● ザクタンク

モビルスーツの戦場での作業性は、ザクによるザクの回収、整備、またマシンガンの分解、整備、組み立てまでが可能である程の物である。但しモビルスーツの生産性と戦場への輸送は机上で考えられる物ほど甘くはなく、実際にはモビルスーツによる侵攻が激化してからは、単に戦闘のみに振り向かれるという状態であった。戦闘能力の欠如したモビルスーツの再利用は戦場からの提案によって有効な物となる。モビルスーツのいわゆる「腕」の効用を活かした作業車輌である型式番号を一応順当にMS-106Vとしてはいる。内容はマセラベースの上へザクの上半身をのせるだけの物で、操縦スティックを無くして腰の可動ユニットを設けただけの物である。試作という程の事もなくアフリカ戦線において工作作業中隊の現場改造でこの組み合わせが行なわれた。

ザクタンクの愛称による同機は全て「再利用」の形で生産され、工作作業に有効性を見出すかたわら、一部武装して陸戦オペレーションにも参加している。ミニビューラーは様々な物が装着され、名称別に正式に分けられるという事もなかつた様である。



HISTORY OF MOBILE SUIT

MS-06E ザク強行偵察型

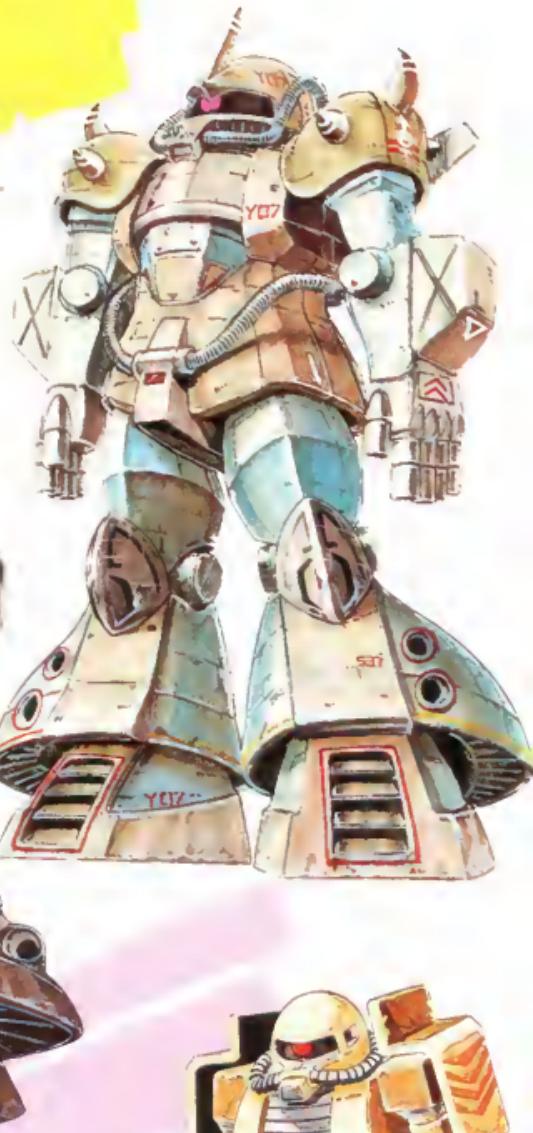


▶頭部メインカメラを3基とし、背部に複合探知システムを設けたMS-06E-3。大戦中期から通常の偵察型Eタイプを改修し、総数16機が生産された。

背部の探知システムは平常時にはすべて後方へ向けて折りたたまれ、タンクとブースターをオフションで装備する場合もあった。「フリッパー」の愛称で呼ばれ偵察行動に従事したが、実際に有効性の見出さる状況自体が減少していた。

MS-07H グフ飛行試験型

▼試作されたHタイプ4機の内、YMS-07Bをベースとした物をさらに改修した性能向上型MS-07H-4タイフ。脚部の推力を増強し、外見的にはフレアが大型化している。肩の装甲は整流効果を考えて形状変更され、左右腰側面には75°可動のペントラルフィンが新たに設けられている。同機はテスト10日目にアリゾナにおいて事故で失なわれた。



MS-06V ザクタンク



◀作業用マニピュレーターを大型化したMS-06V-6。作業等はザクの歩行システムをフルに活用するはずだったが、再生産の有効性からこれら変形型モビルスーツは、戦場での各種作業には比較的有意義な存在であった。

HISTORY OF MOBILE SUIT

MS-14 ゲルググ



ジオン軍のMS技術は連邦を10年上回るとさえ言われたが、RXスーツのビーム兵器標準装備化は、ジオン公国にとつて大きな驚異であった。MS-06を継承する第2期主力モビルスーツはジオン国内で設計がすすめられたが、宇宙戦での急場しのぎには、MS-09の改造型であるMS-R09(通称リツクドム)が採用された。競争相手であったMS-06Rは、結局のところ総合性能にやぶれたが、主力モビルスーツとして開発中だったMS-IIの基本は、MS-06R

2から得たデータによる物であった。MS-IIの目差す性能は、連邦軍のRXスーツに見る機能を踏襲する所が実に大きい物であった。第一の目標は、ビーム兵器の標準装備化であった。但しこれにはさすがのジオン軍も多大な時間を奪われており、ビームライフルの実用化は機体完成より約3ヶ月も遅れている。

YMS-14としての初期生産型の内24機はハイロットに応じたチューニングが施され、増速用ブースターと、ビームキャノンハックが用意された。前者は高機動型MS-14Bとして、後者は重火器支援型MS-14Cとして限定数で承認された。召換されたエースハイロット31名は

状こそジオン公国と判別出来るものの、運用面ではRX-78スーツと何ら変る事はなかつた。第2期主力モビルスーツ構想におけるもう一方の特徴は、MS-07で見せた装甲システムの分離であつた。連邦軍のモビルスーツ量産に伴ない、MS戦がより白兵戦化して行く事を予想し得たからに他ならない。MS-IIは、他の宇宙戦用特殊モビルスーツにナンバーを移すため、MS-14と名称を変更されている。ここでジオン突撃機動軍が編成を要請したのは、明確化しつつあつたニュータイフハイロットを含むエース部隊の編成であつた。少数精銳による敵モビルスーツ部隊撃破の構想は、まもなく具現化された。MS-14は一般用AタイプとしてMS-15を退けて生産ラインに入ったが、宇宙空間戦だけでなく、地上戦も考慮して作られたモビルスーツであつた。そのため大気圏内での機動性を考え、両腕にはジェットエンジン補助推進システム)またエース部隊へ配備されたMS-14Cも、同様に地上戦を充分に考えて作られたタイプであつた。

結局のところMS-14Cタイプは15機にとどまり、MS-14全体の七三八機中一二二機分のCハーツが用意されつづつたが、終戦を迎えたところでストップとなつている。その裏づけともなるMS-14Cの性能評価は高く、最大兵装時間は三六〇ミリロケット砲二門の使用も可能であつた。

MS-06Nから MS-06Nジオングへ



MS-06ザクIIシリーズは数々の局戦用派系型、研究母体を生んだが大戦終結2ヶ月前よりザクの派系最終型の設計提出が行なわれていた。サイコミュシステムを使用するMS-16タイプの基本となるテストベース機である。MS-06Zの開発名称を与えられた本機は、両腕に5連装ビームライフルを有線ケーブルを含んで装備する事が第一に課せられた条件であったが、有線ビーム砲の小型化が効かないため、通常のザクの腕の部分

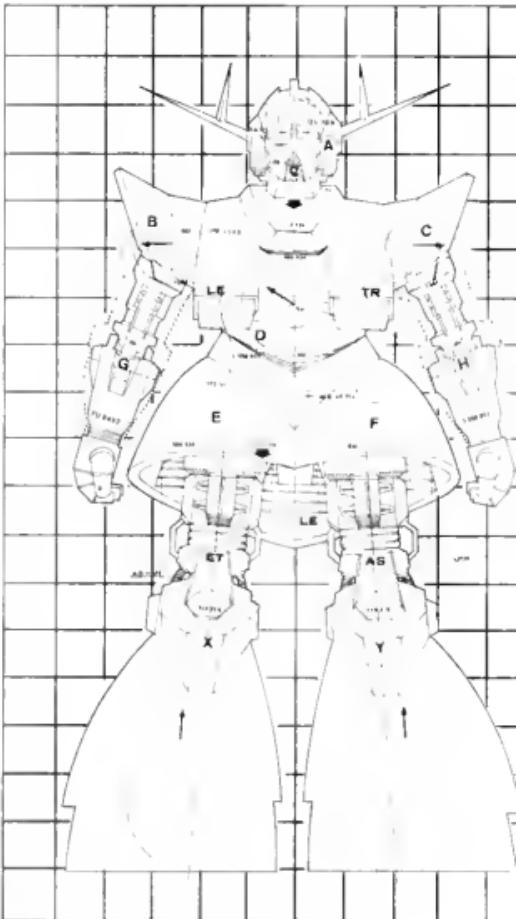
に巨大な腕が代わりに付く形となっていた。高機動戦闘によるサイコミュオペレーションのデータを必要とするため、機体はMS-16の基本フォルムを縮少してザクの各所に高出力ロケットエンジンが装備された。極秘にテストにまわされたのは3機のZタイプで、コードネーム「ビショップ」で呼ばれた。

Zタイプは陸戦用の脚を持つが、製作された3機の内2号機には加えて改修が施され、腰内部より下の歩行ユニットが

取りのぞかれ、代わりにむき出しで4本を取りのぞかれ、代わりにむき出しで4本を一本にまとめた大ロケットエンジンを2本計8基のエンジンを搭載したモビルアーマー並みの機動力を持つタイプへと生まれ変わっている。但し試験時のわすかな時間のみの使用に耐える物で、燃料搭載量の割には、一般的とは言えなかつたMS-16の名称変更時に合わせてMSN-101の名称が与えられている。

MS-16として製作がすすめられたモビルスーツは人型モビルアーマーとしての要素が濃く、次代にならうニュータイフへのさきがけとして期待を背負った、

「ジオング」の名称が付けられた。本機は移動に足を必要としないため、スカートを大型化し、大推力エンジンを集中して装備していた。装甲も完全でないまま、ア・バオア・クーの工場施設で工作調整が続けられていたが、最終戦への突入によって稼動状態までこぎつけた段階でシヤア・アスナブル大佐が使用、RX-78を撃破にまで追い込んだが、工場に工作中の歩行ユニットと2号3号機を残したまま大破消失している。MSN-103ジオングでは、脚も含めてアプロックから成るオールレンジ攻撃も計画されていた



HISTORY OF MOBILE SUIT

MSN-02

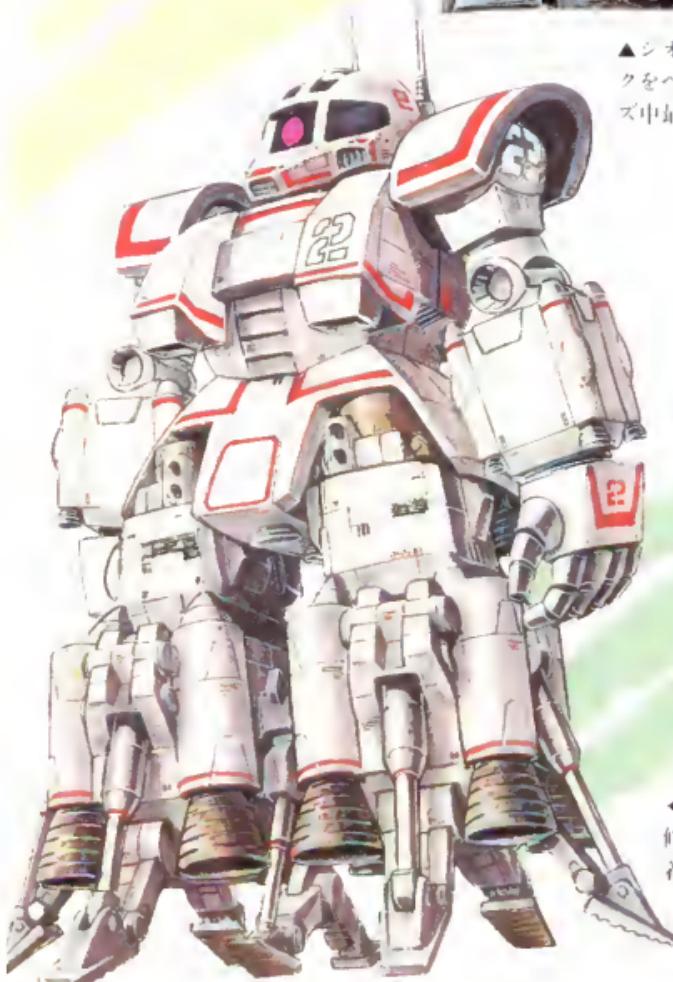


▲セロサイコミュシステムを導入した人型モビルアーマー。脚は不用とも言え、機動性は高かった。



MS-06Z

▲シオングのテストベースとしてザクをベースに改造した物。06シリーズ中最も原型と異なるタイプ。



MSN-01

▲Zタイプを基本に2号機を改修した高機動型。脚は固定で降着用のフレートギアを使用する。

MSN-02 陸戦用歩行ユニット装着オペレーション



▲完成状態のMSN-02。陸戦用の脚が装着され、増
加装甲として脚と腿にもアーマーが取り付けられる。

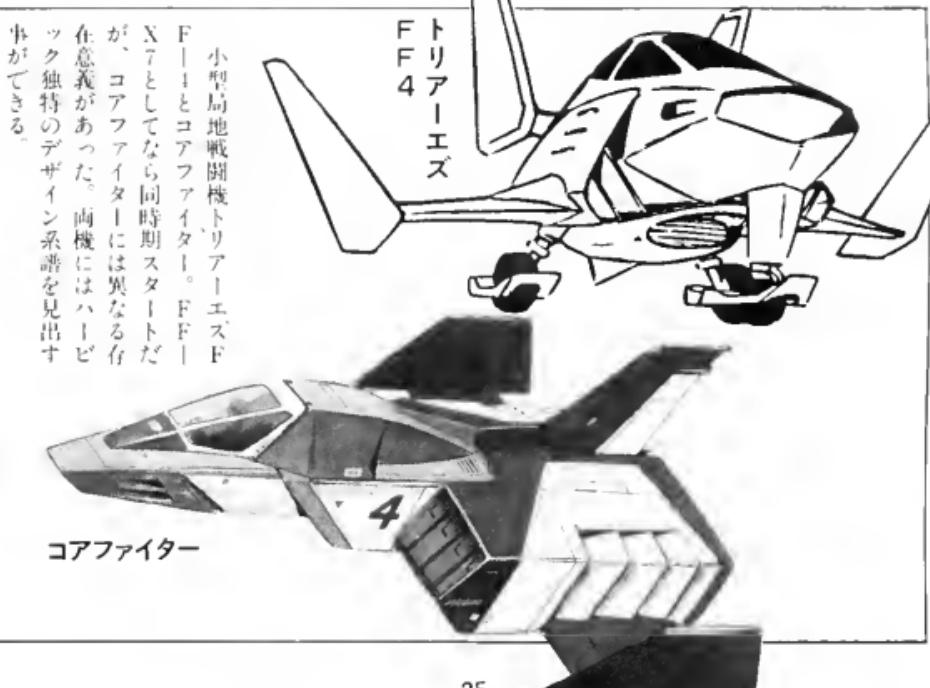
HISTORY OF MOBILE SUIT

コアファイターの開発と 連邦軍MSの誕生

地球全域が連邦化されるまでに幾多の戦争が積み重ねられ、兵器開発は二十世紀後半より限界点を迎えた。航空機開発上の技術的問題は、電子兵器戦では頂点に達したまま約三十年もの歳月を数え、連邦政府に統合後も在来の軍事統合系続は、ほぼ旧態のまま用いられていた。連邦軍の軍備は航空機を主体とする物であったが、旧

態の勢力均衡の産物たる監視衛星の残留により、大気圏内用航空機には新機軸等の研究は成されず、二十世紀末に見られた程度に留まる物であった。しかしながら宇宙空間への軍備拡張は、大戦艦主義と附隨して戦闘機の開発が行なわれた。先行した戦艦の建造による行動半径の拡大化は、燃料消費量の多い戦闘機にとつては、この上ないホームベースとなる。連邦軍には軍事メーカーとしてハービック社とヴィックウェインントン社が対峙していたが、統合後の経験の浅いハービック社は軍部から比較的の冒險度の高い実験機の要請が多く、各方面での再確認的内容を持つ機体を次々に製作して行つた。

在来型の戦闘機は、航続距離の短かい物を主体として局地戦闘機に重点が置かれていたが、宇宙戦での対応と予測される範囲での防衛力として、大気圏内外で近接する空域で最も戦闘力の高い機体へ觀点は移行していくのである。ここでハービック社の新用途戦闘機は段階を四つに分け、高々度戦闘機、小型戦闘機、空間戦用戦闘機、空間戦用攻撃機の方向へと展開する。小型機FF4タイプと、空間戦用機FF-X3セーバーフィッシュは開発を順当に終えたが、高々度戦闘機のエンジントラブルをかかえたまま、ジョン公國の奇襲作戦が開始され、各サイドに駐留する艦隊は、わずかの内に全滅を余儀なくされた。モビルスーツに関するデータを少しずつ回収した連邦軍は、プロジェクトチームを編成し、続く地上部隊侵攻に対してモビルスーツの開発に着手した。移動システムは、重量配分を考慮してキャタピラ走行を採用し、ミノフスキーライ子による干渉をさける事を第一目的としたコンピューターシステムの開発が並行して行なわれた。さらに学習機能を持たせる事によって、交戦データの処理を行ない、短期間での戦闘力の向上にも努められた。そこでこの新技術を敵と交戦した際も回収、かつハイロットの保護にも能力を發揮する物として考案されたのが、コアファイターである。開発途上にあつたFF-X6とFF-X7は、このフランへ統合され、モビルスーツのコクピットと共にFF-X7へと変更された。



RGC-80 GMキヤノン

RX-78と同時にテストへまわされたRX-77とRX-75の内、実用本意で量産化が見込まれたのは、RX-77(通称ガキヤノン)であった。このタイプのRX-78とのコンビネーションは、運用を機上で考へていた時よりもはるかに好ましく、またRX-78との連携によって本来の存在意義を見い出す結果となつた。

実用試験のためサイド7へ運ばれた77タイプは2機、予備として1機分のハーツが用意されたが、母艦となる最新鋭戦艦ホワイトベース級ヘガサスの入港当日ジオン・バトロール部隊から3機のザクの奇襲を受け、1機を除いて消失している。連邦最大の拠点であるジャブローでは、すでに簡易量産型モビルスーツとしてRX-78を基本としたRGM-79を製作、RX-77は4機を残したまま量産はされなかつた。しかしながら本来のRX-78プロジェクトであるコアを中心としたモビル

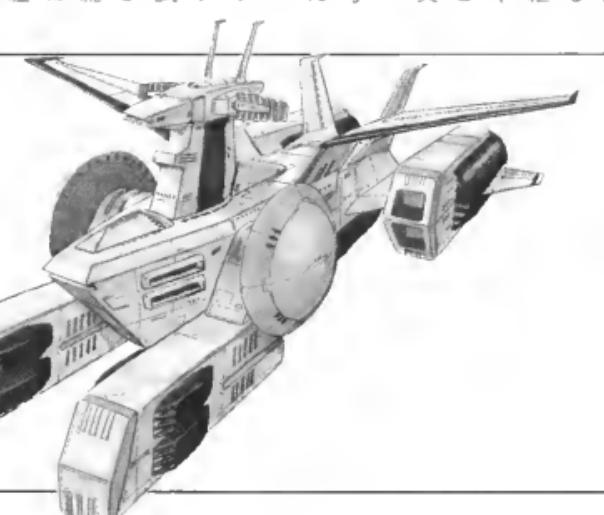
スースの多用途変換構想は77タイプをさらに簡略化する事で残つてゐたのである。脱出システムを廃止する代わりにコアフロックの機能を残し、上半身だけをキヤノン砲装備の中距離支援型にしてしまおうという物である。ジャブローで製作されたキヤノン砲装備のGMは、両肩に三六〇ミリロケット砲を積んだ77タイプとほぼ変わらない物だったが、低反動とは言え重量バランスや安定性に問題が生じたのは言うまでもない。

三六〇ミリロケット砲はその後すぐに改良され、砲身を延長、弾の装填をマガジン式に改めた物が機体の右側にだけ装着された。これによりRGM-79と部品共用度は60%になつたため、量産化に幸いした。生産型はRGC-80 GMキヤノンとしてRX-77ガキヤノンを継ぐ物となつたが、地上戦での安定性には依然不満が残り、ヒザから下に改修が施された。基本的にはRX-77と同じ仕様に

ケット砲が標準の他、RGM-79同様ヒームスフレーカンの使用が可能で、宇宙空間戦での最大装備時にはバルサック式三八〇ミリロケットバズーカを使用する事が出来た。また77タイプからの引き継ぎで中距離射定のヒームライフルの標準装備化も進められたが、結局77タイプと同仕様の物が5機分作られただけで、実戦配備には間に合わなかつた様である。

ジャブロー内の工場で試作された一号機は頭部を77タイプのまま、RGM-79のボディに左右2門の三六〇ミリロケット砲が設けられたが、背部ユニットはブロツク構造に変えられている。ローリールアウト時には77仕様の塗装が施された。試作2号機以降は全て下半身の改造が施され各戦線へ配備された。RGC-80の総生産数は大戦終までに48機を数えるにとどまつてゐる。内ティアンムの主力艦隊と共に宇宙へ上つたのは14機、北米地域には、RGM-79隊と共に6機が送られた。さらにアフリカ戦線には19機が配備された。大戦後の記録でア・バオア・クー戦におけるRGC-80の活躍はあまり見られないが、その大多数がジオンの

ソーラ・レイシステムによつて散つた事は想像に難くない。



HISTORY OF MOBILE SUIT

RX-78-1 ガンダム RMV-1 ガンタンク II
RB-79 ボール(RX-76) スペースポッド

▼スペースポッド

▼RX-78-1



▼RB-79 ボール
(RX-76)



▼RMV-1



RGM-79GM RGC-80GM キャノン

▼RGC-80

I号機及び一般塗装



▼RGM-79一般塗装



▼アフリカ戦線



▼北米戦線



Gアーマーシステムとコアブースター

RXスースの最大の特徴は、脱出システムと操縦システムを一体化した事にあつたが、換装を目的とした構造設計は、その後の連邦軍の兵器開発に大きく貢献した。大型揚陸艦として母艦となるホワイトベース級との並行開発によって、モビルスースの攻撃能力は大きく裏付けられたが、単体での移動性には問題があつた。ビーム兵器を標準装備化しているため、エネルギーの消耗率が高く、機体の軽量化に重点が置かれていたためロケット燃料の搭載量が比較的少なかつたためである。

モビルスースにするために、脱出システムとしてコアファイターを内蔵したRXスースがあつたが、先述の移動力を補なう手段として連邦軍が出した解答は、RXスース（RX-78タイプのみ）にさらに飛行用ユニットを設けるという物であつた。RXスースの実用試験が終了し、実験部隊がデータを出してから急造されたこのプランは、コアファイター、Aバーツ・Bバーツを個別に考え、同規格の換装部分をフルに活用する物である。すなわち、コアファイターを基本として操縦系を持つ中距離支援用戦闘機が2機種（これはBバーツをくるむ形のメインエンジンユニットを、ブースター的に使用し、Bバ

ーツを装着したままコアファイターに操縦系を移す物とコアファイターを直接装着する物である。

Aバーツにはカバーユニットがかぶり、独立した降着装置となるキャタピラタンクを前へ移し、カバーのビーム砲を使ってタンクにする物も2種考案された。（コアブロツク有と無で2種）また飛行ユニット全体も独立して支援用攻撃機として、さらに中間にRX-78を包む形で飛行が可能であつた。個別名称はGバーツと呼ばれ、RX-78を入れた状態ではGアーマーと呼ばれた。

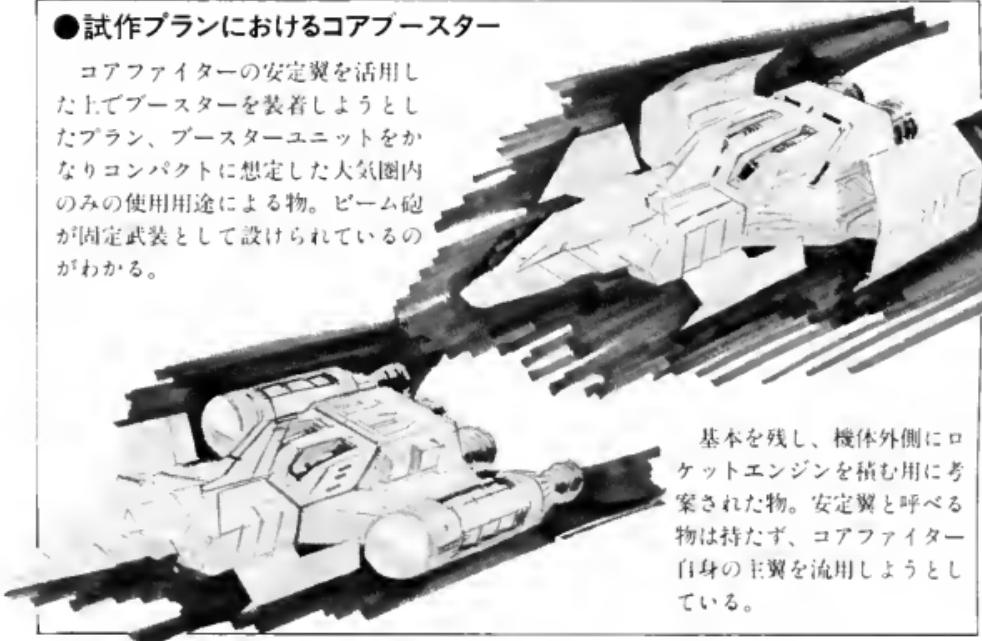
試作されたバーツは2機分で、半端実験部隊用に製作されたも同じである。

コアファイターの戦闘機としての能力は意外にも高かつたため、Gバーツでは支援用戦闘爆撃機化が設られたが、コアファイターをより有効に使用するために、飛行用ブースターが別設計された。コアファイターを操縦ユニットに流用するのはRXスースと同じだが、こちらは純粹な戦闘機としてのオペレーションである。コアファイターの後部に大型のジェット・ロケット兼用エンジンを配し、固定武装としてビーム砲が設けられた。

運用は大気圏内外両用で、大戦末期から実戦配備が行なわれ、地上での有視界航空戦でも多大なる戦果を示した。宇宙空間での使用のみで設計が開始されていただけに、空間での使用も良好で、支援の役割をうまく果したと伝えられる。本機は終結までに16機が生産され、6機が実戦参加している。

●試作プランにおけるコアブースター

コアファイターの安定翼を活用した上でブースターを装着しようとしたプラン、ブースターユニットをかなりコンパクトに想定した大気圏内ののみの使用用途による物。ビーム砲が固定武装として設けられているのがわかる。



基本を残し、機体外側にロケットエンジンを積む用に考案された物。安定翼と呼べる物は持たず、コアファイター自身の主翼を流用しようとしている。

増加武器によるガンダムの強化計画

「A A A」として進行したRX-78を中心とした連邦軍の軍備は、モビルスーツの大量生産と、高性能化であった。「V作戦」の中からは、上層部が期待したニュータイプの覚醒が見られ、その能力増大化に伴ないモビルスーツ自体の運動性能に改善が要求されていた。

大戦終結の兆しが見えてきたところで、連邦軍で計画がすすめられていたのはRX-81とRX-78タイプ用の増加ウェポンシステムであった。ウェポンシステムは、現存するGナンバー機分だけ製作し、特殊バイロットを集めて編成する物であった。RX-81とは、段階としてニュータイプバイロットが使用した時の78タイプを自らに、機動性と武装を強化するという物である。基本的にこのタイプがRX-78の完全量産と呼べる物であり、RGM-79を量産型の78と判断するのにはいさか疑問である。事実上ごく一部の人間の間でしか知らされずにあり、企画案もコード名だけが先に通つてはつきりした78の改修部等の指示はなかった。またRX-81に関しての外形とスペック、運用面での特徴は記録が残っておらず、果してどの程度まで研究が進められていたかは定かではない様である。

計画案として実動寸前にあつた増加ウェポンシステムはFSWSのコードで呼ばれ、装着状態のRX-78は、FA-78-Iの呼称が与えられる予定であった。バーチャルスーム、脚にRGC-80と同様に簡易装着型として設計がすめられていた。

武装は、背部バーツに一体化してロケット砲を装備し右腕には二連装ビームライフル、肩と膝にはミサイルベイが取り付けられる様になっていた。機動力を補なうために、背部と脚部には補助推進装置が用意され、この計

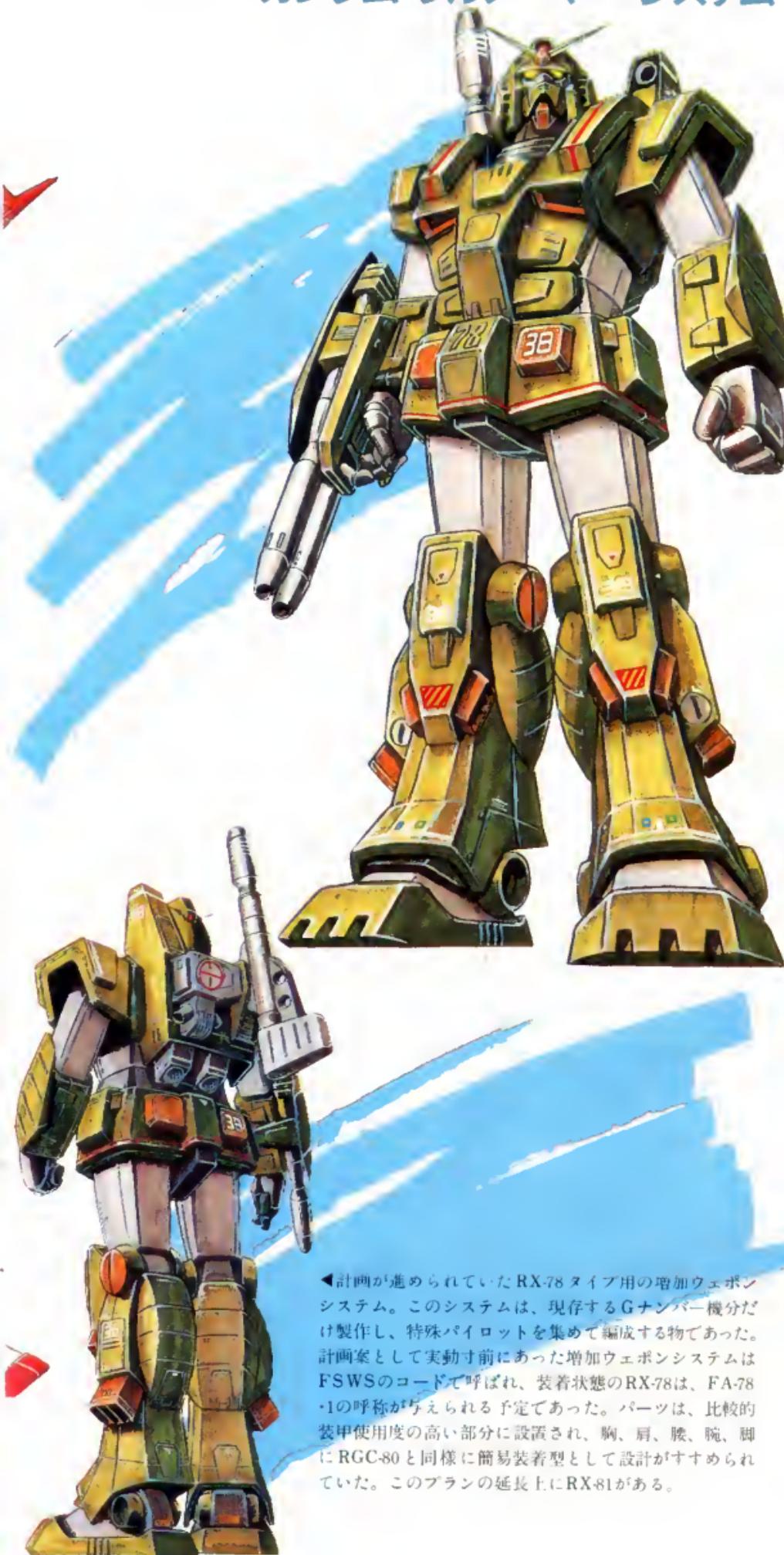
画案には両腕、両足のシステムの違う物も用意された。脚部にはコアブースター並みのロケットエンジンを付け、緊急時には脱離、両腕には固定武装でビームサーべルが一体化されるというプランである。

RX-78ガンダムは終戦を迎えたため、本来の満足の行く性能を充分に発揮できたとは必ずしも言いきる事はできない。増加ウェポンシステムは、重量が倍加するため実際の効力については何とも表現しかねるが、このプランの延長上にRX-81のある事は刻んでおきたいところである。



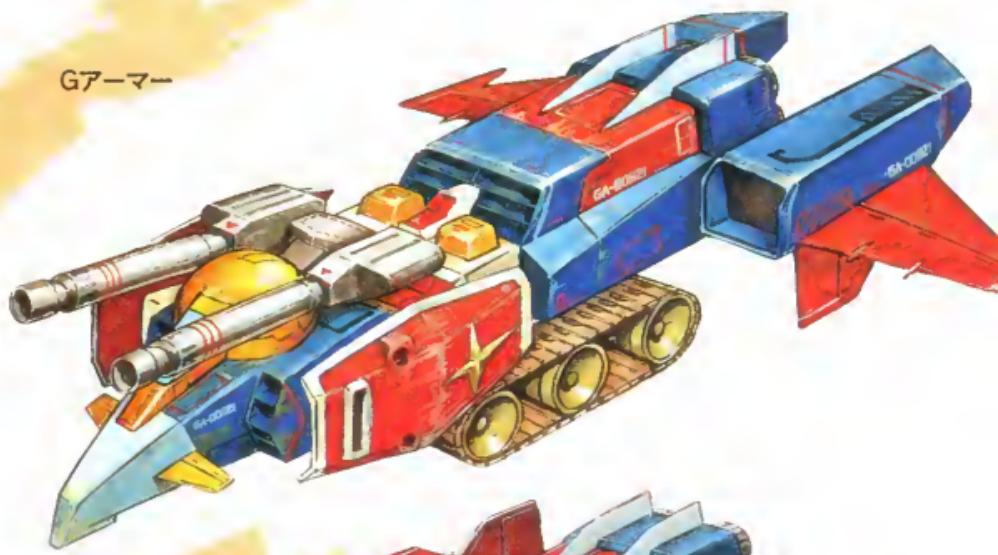
HISTORY OF MOBILE SUIT

ガンダム・フルアーマー・システム

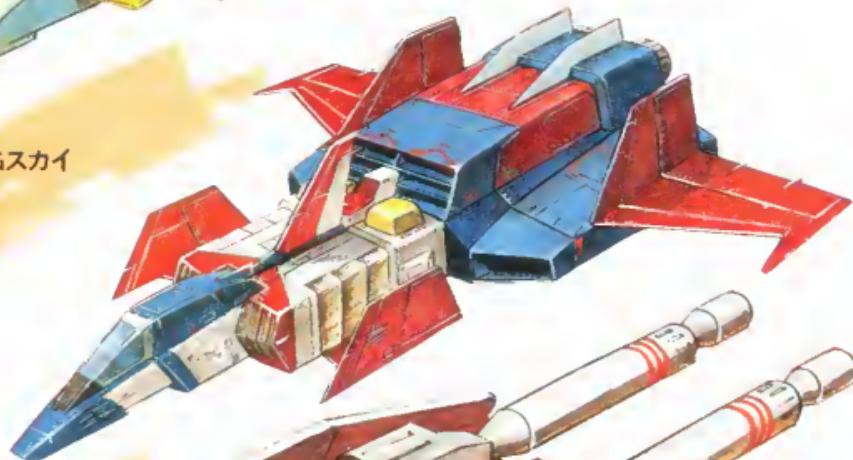


◆計画が進められていたRX-78タイプ用の増加ウェポンシステム。このシステムは、現存するGナンバー機だけ製作し、特殊パイロットを集めて編成する物であった。計画案として実動寸前にあった増加ウェポンシステムはFSWSのコードで呼ばれ、装着状態のRX-78は、FA-78・1の呼称が与えられる予定であった。パーツは、比較的装甲使用度の高い部分に設置され、胸、肩、腰、腕、脚にRGC-80と同様に簡易装着型として設計がすすめられていた。このプランの延長上にRX-81がある。

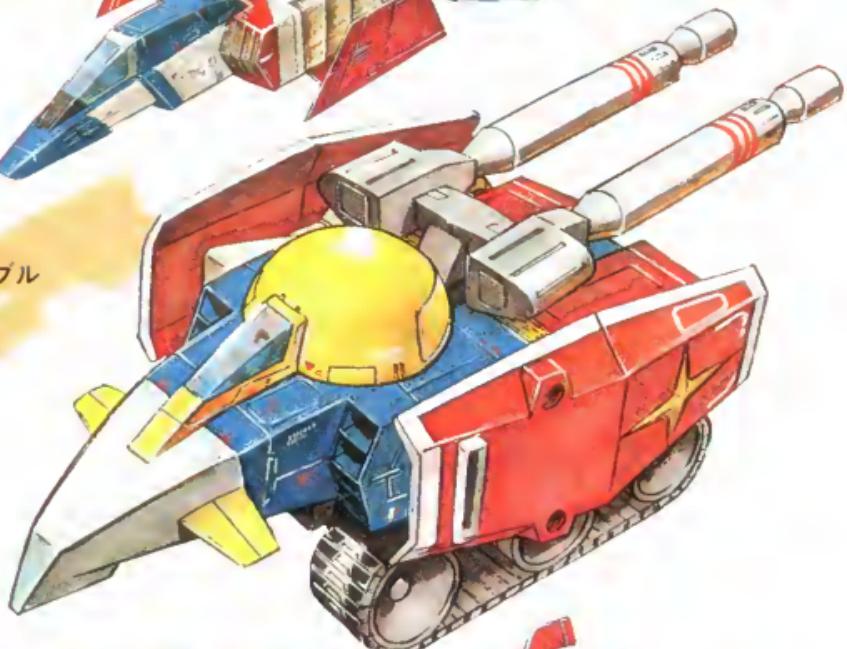
Gアーマー



Gスカイ



Gブル



コアブースター



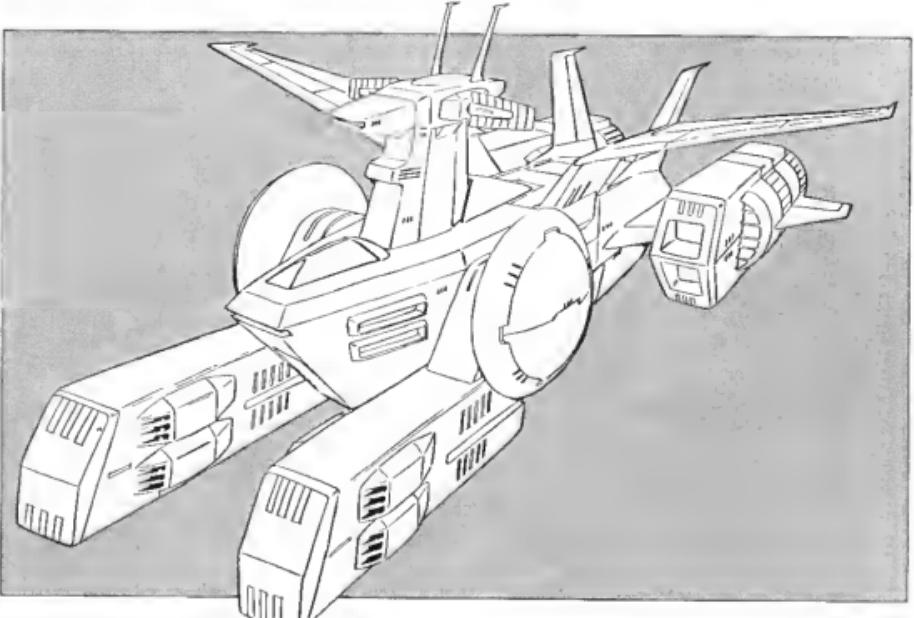
ホワイトベース級 宇宙攻撃空母

連邦軍の最新鋭艦で、V作戦の一翼をなっているのが、ホワイトベース級宇宙攻撃空母である。もともと連邦軍の宇宙空母建造計画は、かなり古くから議論されながらも正規空母は、本級が建造されるまで実施されることとなかった。以前にも連邦軍はトラファルガ級の宇宙空母を建造したことはあるが、これはマゼラン級宇宙戦艦の艦体を流用して両舷に開放型の全通フライテックを取り付けたものである。艦載機数は、トマホーク型空間戦闘機十二機あるいは、パブリク級宇宙船六隻であった。格納庫は持つておらず、艦載機運用能力はかなり制限されていた。トラファルガ級は合計八隻建造されたが、正規空母には分類されずに全通甲板型支援巡洋艦とされていた。このほかにも改コロンブス級（アンティータム級）補助空母二十四隻が、戦時に建造されているつまり、ホワイトベース級は連邦軍にとって、正規空母として計画され建造された初めての艦といえる。

計画立案当時は、SCV-Xのコードネームで呼ばれていた。もちろん艦種は宇宙空母であった。幾度かの設計変更の末、SCV-12計画として連邦議会の承認を得て、細部設計の段階へと入っていった。戦後公表された資料によると、大艦巨砲主義に固まっていた議会を説得するために、一時艦種を艦載機を多数搭載した戦艦としていたのが面白い。この段階で予定されていた艦載機は、ハービック社製のFF-1S 3セイバーファイツュ十二機であった。

ホワイトベース級が実際に建造開始されたのは、開戦前年で三隻同時にジャブローのAプロック船台であった。だが、間もなく起った今次大戦で、ホワイトベース級は大きく変わった。ジオン軍が使用したモビルスーツに対抗するべく開発が開始されたRXモビルスーツ（正確にはRX-77、78）の母艦として、再度設計変更が加えられたのである。そしてSCV-12計画はV作戦に統合され、以後最高軍事機密のなかで建造が進められた。艦種もRXモビルスーツ用強襲揚陸艦へと変更された。もつとも艦種分類は「一番艦」が就役するさに、正式に宇宙攻撃空母となっている。たび重なる艦種変更により、人によって本級が戦艦とか強襲揚陸艦と呼ぶのはこのためである。計画順では一番艦にベガサス（SCV-169）ホワイトベース（SCV-170）の順で完成するはずであったが、実際にはホワイトベースの方が早く完成し就役したので古来の慣習により、本級のネームシップとなつた。三隻目は一番艦の武運にあやかり、ホワイトベースJr.として完成したが、終戦時に一番艦ホワイトベースが戦没したので、救出された乗員によりホワイトベース二世として就役している。

四番艦からはフライテック、ハンガーデッキを大巾に拡大し、より多くの艦載機が運用できるように設計変更がされている。外観上、かなり変化しているので人によっては、改ホワイトベース級とか四番艦名からサラブレッド級とも呼んでいるが、連邦軍宇宙艦艇年鑑では、特に新しいタイプへ分類されていないので、四番艦以後を強いていうならば準ホワ





イトベース級と呼ぶのが正しいだろう。理由としては、三隻計画された艦はどれも同型ではなく、三者三様の外観と運用方法をしていたこととかあげられる。なお共通している点は、一・三番艦の特徴であった主砲とビーム砲を廃し近接防御兵器のみとしたことと、空間戦闘機十二機とRXモビルスース十八機を標準搭載機数としていることがあげられる。

この準ホワイトベース級は開戦直後に相次いでジャフローで起工されたが、実際に竣工したのは一番艦サラブレッド（SCVA-12）と二番艦トロイホース（SCVA-13）の二隻でしかなかった。三番艦（SCVA-14・艦名未定）は、ホワイトベース（SCV-10）の復旧作業用に転用されたため、工程37%で建造は中止され解体されている。

準同型艦二隻を含むホワイトベース級五隻のうち、戦時中に艦隊配備されたのはホワイトベース、ベガサス、サラブレッドの三艦で、ホワイトベースJr.とトロイホースは終戦時には慣熟訓練中であった。唯一戦果を上げえたホワイトベースの艦歴は、前例のない特異なものであったと記録される。同艦は宇宙世紀79年9月7日にジャブローで竣工し、公式試験と慣熟訓練をかねてルナII方面に出撃している。途中、RXモビルスースを受領するために寄港したサイド7で、シャア少佐（当時の部隊の攻撃を受けた。からうじて勝ったものの、正規の乗員の大部分を失い、民間人の手でルナIIへ回航されている。その時の手際は、ベテラン乗員もかくやというほど運用ぶりだったらしい。当時、V作戦の最高司令官であったレービル将軍は、戦時特例法を橋にして同艦に乗り合わせた民間人のうち、主だった者をホワイトベース勤務を命じた。

後にニュータイプとしての素養が認められたことで、実戦部隊としての任務のほかに、新兵器の試験部隊としての任務も命じられている。地球降下後は、各地を転戦しオデッサ作戦を最後に、ジャブローに帰港。一ヶ月半のドック入りの後、星一号、チエンバロの両作戦に参加している。チエンバロ作戦では、ア・バオア・クーへの血路を開いたものの集中砲火を受けて大破着底してしまった。乗員はほぼ全員救出されている。

同艦の戦果は確認されただけで、艦艇十一隻撃沈あるいは大破、モビルスース等一二〇機以上撃墜をマークしている。この中には地球攻撃軍司令ガルマ・ザビ大佐のガウ攻撃空母や宇宙攻撃司軍令ドズル・ザビ中将のビグ・ザムも含まれている。この記録は今次大戦で単独艦の戦果としては最高である。

なお、ホワイトベース級の主要目は次の通りである。全長二百五十メートル、全幅百九十メートル、基準重量六万八千トン、エンジン推力（巡航時）三万八千トン二基、武装五十八センチ連装砲一基、連装メガ粒子砲二基、連装機関砲座十八基、ミサイルランチャー三十二門、艦載機は、RXモビルスース六機、戦闘機等十機、乗員数（定員）二百二十五名。

●ヒストリー・オブ・モビルスース
●発行所／東京都台東区駒形2-5-4
株式会社バンダイ・模型部

●協力／講談社・日本サンライズ

（この本は、昭和58年3月～59年6月に発行されたMS Vハンドブックを一冊にまとめたものです。）

HISTORY OF MOBILE SUIT

メカニカルデザイン
大河原 邦男

■RGM 79ライトアーマー

ビーム兵器戦である事を考慮して、バイロットの要請で徹底した軽装甲とされたタイプ。ハンドガンは、ビームスプレーガンでは無く、ガンダム同様のエナジーキャップ方式によるビームガンである。



■TGM 79シムトレーナー

新体形の兵器であるモビルスーツの実戦配備化のため、シミュレーションの他にこの様な練習機も使われた。装甲材は良質の物は使わず、胸には上下タンデムのコクピットが設けられ、教官席はガラスウインドで覆われる。